

沖永良部島旅行記

2017. 2. 26 (日) ~28 日 (火)



長谷川和世

日本キューバ友好協会西村富明副理事長のたびたびのお誘いに、ようやく2月26日から28日まで、田中正男団長以下総勢10名で「沖永良部島 訪問・交流ツアー 3日間の旅」を行うことができました。

沖永良部島は九州本島から南へ552km、沖縄本島から北へ60km、奄美群島の南西部に位置するオカリナのような形をした島で、鹿児島県大島郡に属し、周囲約60km、県道延長50km、和泊町、知名町併せて人口13000人余りの人が住んでいます。東京からは羽田空港から鹿児島空港（往2時間50分・復1時間30分）鹿児島空港から沖永良部空港（往1時間25分・復1時間5分）のところにあります。

一日目、26日。晴れあがった空と青い海、暖かい気候を想像していたのに、曇り空で雨もぱらつき寒いくらい、少しがっかりして沖永良部空港に降り立った時、なんとデッキに「歓迎日本キューバ友好協会ご一行様」の横断幕を掲げ、おそろいのグリーンのチョッキを着た6人の方々が手を振っていられるではありませんか。思いがけない暖かいお出迎えに感激し、チェックインを済ませて挨拶を交わしていると、奄美新聞社のカメラが回っていて、またまたびっくり、嬉しい旅が始まりました。



まず西村さんの自宅の前につくられた「西村書齋」へ向かいました。道すがら、さとうきび畑、四角いコンクリートの家、赤い土などキューバのような風景が続き、初めて来たような気がしません。「西村書齋」では、田中団長の訪問の挨拶に続き、西村さんからの歓迎の挨拶とともに、戦前からの歴史、米軍占領時代、復帰後の振興事業などについて説明を受けました。「くんじゃいなんでもやっらう会（国頭なんでもやっらう会）ガイドクラブ」が作製された「歓迎のしおり」をいただき、私たちのために何度も打ち合わせ、スケジュールを練り、歓迎会の準備をされたことを知りました。そっと覗いた奥の部屋にはキューバ国旗が掲げてありました。





次にうかがった「南栄製糖株式会社」の関口工場長から、さとうきびから砂糖ができるまでを詳しくお聞きし、4階建ての工場見学をしました。さとうきびは生育時期には地球温暖化を防止し、圧縮する工程で出るバガス（搾りかす）は燃料（製糖設備へバイマオス発電）となり、電力を使っていない、さらに残りは肥料になるなど、全く無駄がない素晴らしい島の宝物、いずれ

は一般家庭にも電力を供給したいと熱を込めて語られました。

宿泊場所は沖永良部島の最南端に位置する、海に面した「おきのえらぶフローラルホテル」でした。西村さんも同宿され、夕食ともに懇談、自己紹介、1日目の感想、キューバとのつながり等を語り合いました。田中さんより、革命後カストロに援助を申し出たところ、鉛筆が欲しいと言われ、全国の労働者が一本二本と持ち寄って送ったことが話されました。私もキューバの中学生がカンテラを持って村々に入り、「カストロに手紙を書こう」（ラブレターを書こうとも）と識字運動をしたことを読んだことがありました。日本の労働者が贈った鉛筆を携えて村々を回ったかと思うと感無量です。それにしても、革命直後でありながら、武器でなく、食料でもなく、鉛筆が欲しいと言ったカストロ、キューバの国造りは何と素晴らしいことでしょう。



二日目、27日も曇り空。9時ホテル出発→各地観光→国頭公民館で懇親会→ホテル着21時20分という盛りだくさんなスケジュールでした。



ウジジ浜は石灰質の岩が、長い年月波や海水による侵食を受けてできた「奇岩」が立ち並ぶ海岸で、波が蹴上げて襲いかかってくるように見えました。1890年9月カナダ船リージ・トゥループ号がウジジ浜沖で座礁した際に島民が乗組員を一生懸命救助にあたったことからカナダと交流があり、記念碑や船のモニュメントがありました。

半崎は東シナ海に面し、断崖絶壁、軍艦に似た黒い岩があり戦争中に爆撃を受けたことがあるとか、私はとても近寄ることができません。2時間ドラマの最後に犯人と対決する場所選ばれそうなところで、「男はつらいよ」のロケ地でもあります。



まごころ製糖は前日の機械化された南栄製糖と異なり、自家農園で育てたさとうきびで昔ながらの製法により作った黒糖を製造・販売していました。古い機械を手に入れて修理し、手回しで絞り、煮詰めています。ここでもバガスは有効利用されていました。クロトン



ンという赤や緑、黄色のいろいろな形をした葉がきれいな木が植えられた庭で楽しい話を聞き、黒糖、糖みつアンダギー、きくらげなどを山ほど買い込みました。

越山公園は眺望のいい小高い丘で緋寒桜が見ごろでした。ここは旧日本軍の沖永良部島守備隊越山陣地跡で、その構築図と第三避難壕（集団自決壕）の説明を受けました。

沖永良部島の戦死者は1,150名、爆撃等による死者42名、全焼家屋は1,449戸に上ります。旧日本軍は米軍の戦車の上陸に備え、陣地の周りに戦車壕を掘り、上陸してきてそこに落ちたときには手りゅう弾を投げ込む手はずになっていました。住民の避難については、自宅の防空壕→集落ごとの防空壕→戦車壕外側の山の中腹のくぼみに作った防空壕（第三避難壕）の順で、最後は死に場所となっていたそうです。子ども（今の小学5,6年生）が夜中に山道を覚えて避難する訓練もされました。



今も残る戦車壕の外に掘られた防空壕の跡に、住民の安全よりも軍隊の守備に重きを置くことに怒りを覚えました。実際には上陸作戦は行われませんでした。上陸作戦があれば住民の被害も多大であったと思います。

沖永良部島は、第2次世界大戦後、沖縄とともに米軍の統治下となり、8年間の紆余曲折を経て1953年に日本に復帰しました。

私は今回の旅行の直前に、西村さんの「奄美群島の近現代史～明治以降の奄美政策～」(南

島叢書 海風社 1993年10月初版)を図書館から借りました。400ページちかい著書で、とても読みましたとは言えませんが、戦前の困難な歴史、統治下の苦闘の歴史、復帰運動の中で、奄美群島の復帰請願運動署名は満14歳以上の99%にのぼったこと、一時「沖永良部・与論は分離される」との報が入ったことや、復帰成るの朗報に奄美中が喜びに沸き返ったことなどを知りました。



越山公園には、日本復帰60周年を記念して建立された「日本復帰記念碑」があり、復帰運動の一端を知ることができます。公園の一角所に「海に出て木枯帰るところなし」という昭和19年に山口誓子が詠んだ句の直筆の石碑があります。西村さんは「教科書ではいろいろ解説されているが、特攻隊のことを思って詠んだ句ではないか」と話されました。

西郷隆盛は、文久2年(1862年)に島津久光公の怒りに触れ、沖永良部島に流罪となり、2年間を過ごしました。沖永良部島には、西郷隆盛上陸の地、南洲神社、西郷南洲記念館などがあり、格子牢の跡がありました。島にいる間に教育、道徳、飢えに備えて食糧を備蓄するなどを教えたそうです。

日本一のガジュマルの木は、創立118年の国頭小学校の校庭に大きく枝を広げ、新日本名木100選に選ばれています。第1回卒業生が卒業記念にガジュマルの木18本を植え、その後生徒数が増えるに従い校舎を増設することになったために校庭が狭くなって、ガジュマルの木を伐採することになったところ、卒業生が1本だけは残してと訴え、以来、戦争や台風



を乗り越えて大事に育ててきました。

西村さんはこどものころ登って叱られたそうで、ガジュマルの木はずっとこどもたちと仲良く遊んできたことでしょう。校長先生は「国頭の地域の方たちとはいつも交流があり、こ

の木は心のよりどころとなっている」と話されました。校庭には汐汲みの像が二つあり、ため池の無かった昔は米が作れず、海水を干して塩を作り、頭に載せて十里の道を歩き、米と交換していたそうです。

ここで、南海日日新聞社の取材を受けた徳永治子さんが、「私が卒業した小学校、中学校がともに廃校になっているので、このように118年も続いていることがうらやましい。この木を中心につながりを大事にして」と語りました。

お土産に日本一のガジュマルの木の種から育てた小ガジュマルの苗をいただきました。東京では冬の間室内で育てるそうで、あまり大きくならいように小ぶりの鉢に植え替えたところでした。



脇田誠一郎さんの島桑茶のお店を訪ねました。有機無農薬栽培から作られた島桑茶は機能性食品で、様々な効用がある島の桑は宝物との説明があり、桑茶、アンダギー、青パイヤのお料理等いろいろおもてなしいただきました。脇田さんが役場にいたころ、西村さんからキューバのことを聞き、男性4人女性2人の視察団をキューバに送り、キューバからも視察団が来て歓迎会をしたので、キューバには親しみを持っていると話され、いつか詳しいことをお聞きしたいと思いました。

暗川（ホー）は地下を流れる川のことです。昭和42年に水道が普及するまでは、女性が深いところまで降りて生活水を運んでいたそうで、今も残る急な勾配で下る坂道の先にある地下水を取るための穴の跡に、当時の毎日の重労働が偲ばれました。

フーチャは塩を噴き上げる洞窟です。強風の日には波がたたきつけられ70mも吹き上がり、島中を洗って作物を駄目にしていたそうで、今は4か所のうち3か所を破砕し、観光用に1か所のみ残っていますが、それでも大変な威力で、こわごわ側に近寄るほどでした。塩干浜は、昔塩水を撒いて塩を作っていたところでした。

岬神社は日本で二つしかないお社の無い神社で、漁業・海上安全・五穀豊穡の神として祀られ島の守り神として信仰されています。ガイドクラブの方が手入れしたえらぶユリが美しく咲いていました。ここで、全員が和泊町有線テ



レビのインタビューを受け、沖永良部島の感想などを話しました。どのように放映されるか
いささか心配でしたが、さすが徳永さん、CDを送ってもらうよう頼んでくださいました。

耳付池は、周囲 800m、面積 4 町歩、貯水量 9 万トンの奄美群島第一の大きなため池です。
沖永良部島にはたくさんの溜池があり農業用水として稲作に利用されていましたが、減反政
策で米を作れなくなりました。西村さんは自分たちの食べる分を作りたいと話していました。



和泊町でお待ちかねのお買い物。
女性陣は大張り切り、ジャガイモ、
えらぶユリ、もちろん焼酎などを宅
急便で送ったり、あれこれ迷いなが
ら買い込んだりとお満悦でした。

いよいよ国頭研修館での歓
迎会、久しぶりに笑って、おし
ゃべりをいっぱいして、踊って、
楽しかったの一言に尽きます。
「くんじゃいなんでもやった
ろう会」の皆さん、字区長さん、
副区長さん計 26 名の方たちと、
友好協会の 10 名が交互に座り、棚窪時雄さんの軽妙な司会で歓迎会が始まりました。



田仲稔会長から「西村先生を慕って、辺鄙なところへよくおいでくださいました。ガイド
クラブが大勢の人を迎えるのは初めてで、話し合いを持ち、準備して
きました。これからも折にふれこの旅を思い出してください」との歓
迎の挨拶に続き、友好協会の自己紹介、1 回目の乾杯の後、蛇味線の
伴奏で、色鮮やかな琉球衣装に身を包んだ「琉舞 ふくらしや、仲里
節」が続きました。「ふくらしや」は宴の前に必ず
演じられる踊りで「よろこびごとがまたありますよ
うに」という踊りです。



その後も踊りの合間に乾杯が入ります。沖永良部
島では 15 回まで乾杯があるとか、確かに来賓挨拶
が延々と続くより、たびたび乾杯する方が宴席がま
とまると感心しました。健康にいい「島桑茶」を作る脇田さんは「今年
の目標は思いやりです」と話し、南栄製糖の関口さんは「人を明るくす
る砂糖を愛して」と語ります。



「ひばりのマドロスさん」はそろいの縞のシャツ、白いパンツにマドロスハットをかぶり6名の方が踊りました。「やっこ」は、友好協会の面々も島の皆さんに教えられて、扇の代わりにお弁当の蓋をかざして踊りまくり、本田剛さんは「グァンタナメラ」を熱唱、徳永さんのサルサ教室と宴は盛り上がりました。

三日目、28日、この日は美しい日の出を見ることができました。

大山展望台は航空自衛隊沖永良部島分屯基地の中にあります。以前は米軍の基地があったところで、今は自衛隊の情報基地となり、中を通り抜けることができるのは、島民との対立を防ぐためとのことです。

展望台は島で一番高いところで、高さ245m、90段の階段上ると、360度のパノラマで島が一望できました。穏やかな海を眺めながら、大昔、大陸から島影も見えない大海原を何に突き動かされて渡ってきたのだらうと思いを馳せました。



沖永良部島には鍾乳洞がたくさんあり、中でも最大の「昇竜洞」を見学しました。88段の階段を下った地底はキラキラと輝く別世界でした。沖永良部島では、洞窟探検ケイビングツアーもできます。



「沖永良部芭蕉布工房」の長谷川千代子さんを訪ねました。私は澤地久枝さんの「琉球布紀行」で、沖縄で芭蕉布作り続けた平敏子さんのことを読んで以来、実際に芭蕉布を織るところを見たいと思っていましたので、今回の工房訪問を楽しみにしていました。平さんは戦時中、沖縄女子挺身隊員として岡山の工場で働き、終戦後16歳の時に、岡山倉敷紡績社長の大原氏から告げられた言葉、「沖縄へ帰ったら、沖縄の織物を大切にしたい」の一言が芭蕉布製織に奮闘したきっかけとなったということです。

千代子さんは町で大島紬を教えていましたが、定年後に平さんを訪ねたときに、これだと即、平さんの弟子になり芭蕉布を始められたということで、その行動力に感激しました。千代子さんのお宅の前では、朝切り出した芭蕉の皮を剥いで三通りに分ける作業をしていました。その後、煮てから繊維を取り出し糸にしていく工程の説明を聞く間もなく、上がって上がってと。織り機の置いてある部屋に入ると、食べて、食べて、朝から作っていたのよとお菓子が出てきて、そのうえレシピを教えてください…「あの一



芭蕉布を織るところを見たいのですが」と言うとうと織り機の前に座って実演してくださいました。芭蕉布を織るときはつばをつけるため、無農薬で栽培しているから、畑に行こうと、とにかく芭蕉布が大好きで、人が大好きということが伝わってくる、なんとも魅力にあふれる方でした。工房を新築中でししたが、後に続く人がいるからこそでしょう。

「東京で作品展を開くときは来てね。ここに住所を書いてね。」と、もちろん駆けつけるつもりです。

田皆岬は東シナ海に突き出た、高さ 51m の絶壁で、風が吹き渡り、ツワブキが生えていました。奄美では、豚骨とツワブキの料理がないとお正月にならないそうです。



帰途、会員の皆さんが空港に見送りに来てくださり、別れを惜しみました。今回の旅で、歴史のなかで大切にしてきたもの、自然を生かした産業を見、なによりも沖永良部島が大好きな方々に出会い、暖かいおもてなしを受けました。西村さんは人と人とのつながりを大切に交流していきたいといわれました。

東京に帰って、素晴らしかった旅、素晴らしかった方たちのことをたくさんの人に話していこうと思いながら、実り多い旅を終えました。

(3月1日の奄美新聞、南海日日新聞に交流の様子が掲載されました)

